ひなたの匠

Hinata no Takumi

生活の中の逸品

みやざき 伝統的工芸品MAP

① 高千穂町
高千穂神楽面
かるい

② 日之影町
かるい
竹工芸品
高千穂郷しめ縄・わら細工

③ 五ヶ瀬町
魔よけ猿

④ 椎葉村
椎葉神楽面

⑤ 諸塚村・美郷町
めんぱ

⑥ 西米良村
てご

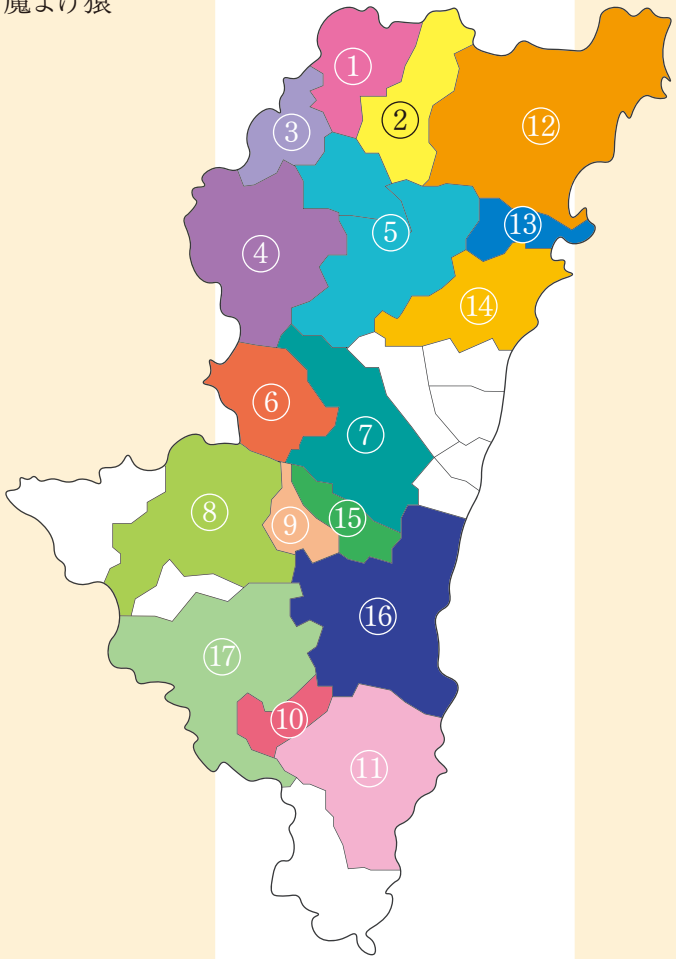
⑦ 西都市
竹工芸品
日向剣道防具

⑧ 小林市
日向榧碁盤・将棋盤
小林籐工芸品
日向竹刀

⑨ 綾町
綾の手紬-宮崎手紬-
日向榧碁盤・将棋盤

⑩ 三股町
日向焼
手打刃物

⑪ 日南市
四半的矢
日向工芸家具



⑫ 延岡市
のぼり猿
紅渓石硯
日州透かし象嵌
延岡五月幟
大漁旗

⑬ 門川町
門川太鼓

⑭ 日向市
日向はまぐり碁石
宮崎手漉和紙

⑮ 国富町
法華岳うずら車

⑯ 宮崎市
宮崎ロクロ工芸品
小松原焼
宮崎漆器
ひむか・久宗の矢
四半的矢
佐土原人形
神代独楽
久峰うずら車

⑰ 都城市
※本場大島紬
※都城大弓
宮崎ロクロ工芸品
都城弓
都城木刀
さつま絣
日向竹刀
ごったん

※国指定伝統的工芸品

宮崎県の伝統的工芸品

伝統的工芸品とは

伝統的工芸品とは、長年受け継がれてきた伝統的技術、原材料を用いて手工業的に製造される工芸品のことで、県又は国の定める指定要件に基づいて指定されます。
現在、宮崎県内では宮崎県指定伝統工芸品に37品目、国指定伝統的工芸品に2品目が指定されています。指定要件は、以下のとおりです。

宮崎県伝統的工芸品等指定要件

伝統的工芸品

(1)その製造過程の主要部分が手工業的であること。
(2)60年以上の歴史を有する伝統的技術又は技法により製造されるものであること。
(3)伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ製造されるものであること。

宮崎県知事指定
伝統的工芸品指定マーク

指定事業者

(1)おおむね30年以上にわたって当該県伝統的工芸品を制作していること。
(2)当該県伝統的工芸品に関して伝統工芸士として認定を受けたものが在籍していること。
注意:(1)(2)いずれかに該当すること。

伝統工芸士

(1)宮崎県内に居住していること。
(2)宮崎県伝統的工芸品の製造に15年以上従事していること。
(3)宮崎県伝統的工芸品の製造に関する高度の伝統的技術・技法及び必要な知識を有しその維持・発展に努めていること。

国 伝統的工芸品等指定要件

伝統的工芸品

(1)主として日常生活の用に供されるものであること。
(2)その製造過程の主要部分が手工業的であること。
(3)伝統的な技術又は技法により製造されるものであること。
(4)伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるものであること。
(5)一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事している　ものであること。
注意:ここでの“伝統的”とは、およそ100年間以上の継続を意味します。

伝統工芸士

(1)国指定の伝統的工芸品の製造に12年以上従事していること。
(2)(1)の要件を満たす者のうち、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会が行う伝統工芸士試験に合格した者であること。

伝統マーク

このマークを使った伝統証紙が貼られている工芸品は、産地組合等が実施する検査に合格した経済産業大臣指定伝統工芸品です。

宮崎ロクロ工芸品

Miyazaki-rokuro・kougeihin

艶やかな木肌の手触りが時が経つのを忘れさせる

宮崎ロクロ工芸品は、ケヤキ材・サクラ材等を材料にして、製材・木取・荒ぐり・乾燥・仕上・塗りの各工程を経て製作されます。

特に、仕上工程では、この工程の善し悪しが次の塗りの工程に大きな影響を与えることから、熟練した精密な木地づくりの技術が要求されます。

また、塗りに使用される塗料も、長年の経験を生かした全国唯一の色のものも開発されています。

品目は、四方盆・コースター・なつめ・盛鉢等、それぞれの素材の特長をつかみ、木肌をそのまま生かしたものが多く、形状も宮崎の自然や風土を生かした感じのものになっています。

作業工程

材料となる木は市場で購入する。

碁笥のふたとうつわが取れる大きさにカットする。

碁笥の状態に荒削りしたものを乾燥させる。

加工
少しずつ形をつくりながら削っていく。専用の道具で高さや幅を調節しながら削っていく。

磨き
カルナバロウを使用しつや出しを行う。
摩擦の熱で伸ばしていく。

磨き（ふた）

磨き終わった完成品

DATA

西川木工ろくろ工芸

〒885-1104
宮崎県都城市野々美谷町907-1
☎090-3324-4462

[その他の取り扱い事業者]
- 向陽園　☎0985-25-5035(宮崎市)
- 丸信木工　☎0986-22-3475(都城市)
- 元吉製作所　☎0986-23-5252(都城市)
- 山之上木工ろくろ工芸　☎090-1169-2416(都城市)

HPはこちら

ご購入可能店舗

ひなたの匠

Hinata no Takumi

匠の道具

加工時に用いる「のみ」

西川 崇さん(県伝統工芸士)

ロクロ工芸品を作り続けて今まで、満足した商品は作れていない、と西川氏は語ります。ロクロ工芸品は国内はもちろん、中国からの注文も多いそうです。技術を磨いて満足できる逸品を作るために、体が動く限りは商品を作り続ける思いで、工芸品づくりと向き合っています。

宮崎手漉和紙

Miyazaki tesuki-washi

手漉きだからこそ出せる独特の手触りや美しさ

和紙の製法は、高句麗（こうくり）の工芸僧曇徴（どんちょう）によって、日本に伝えられたと言われています。

本県では、平安時代頃から生産されるようになったと言われており、江戸時代以降、重要な産物として生産が奨励されました。

国富、綾、穂北、美々津などで、盛んに生産がされていましたが、機械和紙や西洋紙におされ、現在では、わずかに一軒がその伝統を守っています。

原料は、こうぞ、みつまたなど強くてしなやかな木が使われます。製法は、原料を蒸し、皮をはぎ、ソーダ灰で煮た後、繊維がほぐれるまで、清流でさらし、繊維がくだけて湿った綿状になった後、手漉で漉きあげ、乾燥させて仕上げます。

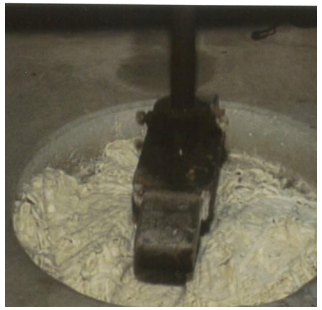
最近では、障子紙や書道用紙などの実用品のほかに、手漉和紙のもつ独特の手ざわりや美しさを利用して、名刺や封筒、便箋、はがきなどの製品が作られ、愛用されています。

作業工程（美々津の手漉き和紙）

原料処理
原木を窯で蒸したのち、皮をはぎ、天日により乾燥する。

煮方
楮皮を釜に入れ、苛性ソーダを加え柔らかくなるまで煮る。

あく抜き
柔らかくなった楮皮を清流にさらし、ソーダ分を抜く。



叩解
打解機により楮皮を打ちたたき、水を加え、なぎなたビーターでかくはんする。

ねり
叩解した楮皮に「のりうつぎ」を加えかき混ぜる。

紙漉き
水の入った漉き槽に紙料を入れ、簀桁により紙を漉く。

圧搾
漉いた紙を数百枚重ね、圧搾機により水を絞り脱水する。

乾燥
圧搾した紙を一枚ずつ乾燥機にはけではり、蒸気により乾燥する。

仕上げ
乾燥した紙を用途により断さいする。

ひなたの匠

Hinata no Takumi

佐々木 寛治郎さん（県伝統工芸士、現代の名工）

昭和63年度に伝統工芸士の認定を受け、平成5年度には日向市文化賞（技術部門）を受賞、平成21年に現代の名工を受賞しました。現代の名工では、手漉き和紙分野で高い技術と知識を有し、美々津手漉き和紙の伝統的技法を守りつつ、新技法を開拓し、伝統的工芸品の維持・発展に貢献しており、また後進者の育成にも尽力しているという技能功績で受賞しました。佐々木氏の紙漉きは「和紙処佐々木国吉」の称号をもつ父国吉からの技術伝承で、土佐和紙の影響を受けたと言われています。令和3年に逝去。

DATA

美々津手漉き和紙

〒889-1111
宮崎県日向市美々津町2703番地

※現在は製作・販売されておりません

HPはこちら

手打刃物

Teuchi-hamono

木炭の炎を職人技が鍛え上げる卓越した刃物

かつて農村には生活必需品の鍬、鎌、包丁などの鉄製品を打つ鍛冶屋が身近にいました。

手打刃物は、はがね割込や焼きもどし、焼き入れなどの製造工程に昔ながらの木炭を使い、焼いては叩き、焼いては叩きを繰り返して一本一本手作りで丁寧に仕上げられます。

確かな切れ味で長年使える製品は県内外から高い評価を得ています。

作業工程

木炭で火起こし。

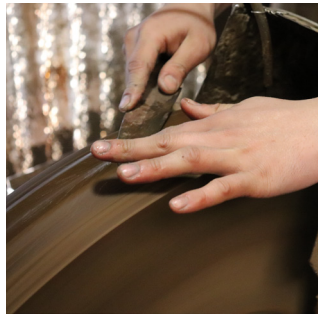
火を起こした木炭で金属を焼く（温度が800°C近く上がる）。

金属を叩く。

研ぎ
研磨は最初荒く、順を追って細かくしていく。適温を素手で見極めながら行う。

焼き入れ
研ぎ終えた刃物に泥を塗り、約800°Cに熱した油の中に入れた後、冷却する

刻印



研ぎ
ゆがみ等をなくす。

磨き（仕上げ）

完成品の黒打包丁
黒皮を残すことでサビを防ぐ。

DATA

松崎刃物製作所

〒889-1914
宮崎県北諸県郡三股町大字蓼池4395番地3
☎0986-52-4806

購入の際は、是非工房にお越しいただき、直接お手に取り、その重さを感じてください。

[ご購入可能店舗]
・物産館「よかもんや」　☎0986-52-3131(三股町)

HPはこちら

ご購入可能店舗

ひなたの匠

Hinata no Takumi

松崎 英雄さん(県伝統工芸士)

平成20年度に県伝統的工芸士に認定されました。8人兄弟の長男にあたり、父親の跡を継ぎ現在2代目です。後継者が2名いるので、そろそろ世代交代をする予定。伝統の技を継承する2人には全ての技術を託しました。松崎刃物製作所では包丁、農業用道具、カマ、キャンプ用品を製作しています。

竹工芸品

Take-kougeihin

日常に根付いた暮らしの道具に宿る美しさ

温暖で雨量の多い宮崎県では、各地に美しく良質の竹林があり、竹は昔からいろいろな分野で利用されてきました。

現在、日常生活用品としての竹製品は、プラスチック製品などの進出や海外からの輸入によりほとんど生産されなくなってきましたが、日之影や綾地方では昔ながらの竹工芸品づくりの伝統が継承されています。

竹工芸品は、竹の選別、乾燥、竹割り、竹ひごづくり、編み等の工程を経ますが、すべて手作業による熟練の技が要求され、一人前になるには十年かかると言われます。

日之影や綾の竹工芸品には実用性を追求してきたゆえに生まれた美しさがあります。奇をてらったり、装飾性に走らず、使い易さ、丈夫さを追求し突きつめた美しさと言えます。

なお、日之影の竹工芸品は、日本の伝統文化を継承する優れた民芸品として、アメリカ合衆国のスミソニアン博物館にも収蔵されています。

作業工程

竹を切る。
10月にまとめて伐採し、山で保管する。
材料は約1年間で使い切る。

竹ひごを作る。
竹を割って細くし、剥いでさらに薄くする。

完成した竹ひご

補強となる縁を作る。
表と裏を丁寧に剥ぎながら薄くする。

縁を曲げる。
底縁の角は七輪であぶって曲げる。修業で得た感覚で温度を見極め、少しずつ曲げる。

縁を曲げる。
曲げた後は冷水に浸し固める。

曲げの完成

縁を取り付ける。

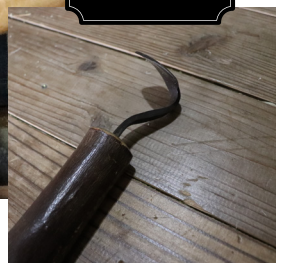
完成品

ひなたの匠

Hinata no Takumi

小川 鉄平さん

匠の道具



小川氏の道具（手作り）

小川氏はもの作りが好きで、県外より移住してきました。県伝統工芸士である、飯干氏に弟子入りし、現在に至ります。現在は1人で製作を行っているため、注文を受けても約2〜3年待って頂いている状態で非常に忙しいそうです。しかし、今後は作りたい作品があり、いつか形にしたいと頭の中で描き続けています。竹細工が日之影町でもっと盛り上がると非常に嬉しい、と語りました。

DATA

竹細工資料館

〒882-0401
宮崎県西臼杵郡日之影町大字七折8705番地12
☎0982-78-1021

[ご購入可能店舗]
- 大前竹細工店　☎0983-43-1447（西都市）
- 道の駅「青雲橋」　☎0982-87-2491（日之影町）
- 有限会社高橋書店　☎0982-87-2018（日之影町）

HPはこちら

かるい

Karui

竹の幾何学模様から目が離せない

かるいは、高千穂地方に古くから伝わる生活用具で、山間部での荷物の運搬用に考え出された、竹で編んだ背負いカゴです。

竹の選別、乾燥、竹割り、竹ひご作りなどの製作過程は、どれをとっても長年磨かれた手づくりの勘が必要で、特に、編みながら形を整えること、ふちを巻くことが至難の技です。

生活用具としてのかるいは、人の背中に合わせて作られた形の大きいものですが、現在では、装飾や郵便受けに使用できる小型のものも作られています。

竹の光沢と逆三角形が調和した見事な工芸品です。

作業工程

四つ割り
竹の根本に割れ目を入れ、十字の形をした専用の道具を使い4等分にする。

荒割り・小割り
内側の節を削り取り、更に細く割り割いて必要な本数の材料を作る。

はぎ
竹の内側の余分な肉を剥ぎ取る。
さらに表皮のみを残して刃物を入れ、「ひご」を作る。

削り（裏すき）、幅揃え
ひごの裏側に包丁の刃を押し当てて削り取る。さらに幅揃え機で、ひごの幅を均一にする。

底編み
底の部分を20数本のひごを六つ目に編み進める。

帯入れ
横帯を入れながら上部に編み進める。用途に応じて横帯と縦のひごの締め方を調節する。

編みおろし
底へ向かって編みおろしていく。

縁巻、力竹
両横と底に力竹を取り付け、強度を高める。入口付近の縁を隙間なく丁寧に埋める。

背緒紐の取り付け
わら細工の緒紐を取り付ける。使用者の体格によって調整可能。

ひなたの匠

Hinata no Takumi

廣島一夫さん(県伝統工芸士、現代の名工)

廣島氏は15才の頃から約80年に渡って竹細工づくり一筋に生きてきた職人です。
現在は残念ながら逝去されていますが、その功績は宮崎県の竹細工にとって大きいものでした。
昭和58年度、宮崎県伝統工芸士に認定され、平成4年度には国の卓越した技能者表彰「現代の名工」を受賞。平成20年度、日之影町竹細工資料館が開館し、資料館では廣島氏の寄贈した163点の作品が展示されています。

DATA

竹細工資料館(日之影町観光協会)

〒882-0401
宮崎県西臼杵郡日之影町大字七折8705番地12
☎0982-78-1021

[ご購入可能店舗]
・道の駅「青雲橋」　☎0982-87-2491(日之影町)
・有限会社高橋書店　☎0982-87-2018(日之影町)

HPはこちら

てご

Tego

山間部の暮らしを支えてきた背負い式の袋

「てご」は、小物を入れる背負い式の袋状のもので、山間部でのあらゆる作業や生活の必需品として使われてきました。その起源については定説はありませんが、焼き畑農耕の進化に伴い、農耕用具の一つとして作り出されてきたものと考えられます。

材料には、近隣に自生する「すげ」などが主に使われ、これを細かく裂いて、なわ状にしたものを編み上げて作られます。

作業はすべて手作業で、使う縦なわ、横なわの本数によって「いの目」編み、「あばら」編みに分かれ、さらに縁取り、装飾用に「装束」編みという技法が使われます。

また、生活様式の変化に伴い、従来の作業用のてごのほか、日用品としての買物用のリュック、かごなども作られています。

作業工程

①すげ採取（秋の彼岸の頃から自然のすげの株の芯を採取）
②陰干し（2ヶ月ほど陰干し）　③すげの整理
④縄ない（いの目てごは336m、あばらてごは224m）
⑤みずのりをつける　⑥枠づくり　⑦縄かけ
⑧縄編み　いの目てご：縦縄2本を横縄2本で編みあげる　あばらてご：縦縄1本を横縄2本で編みあげる
⑨装束ない（縄2本でなったものをさらに2本合わせてつなげ1本にする）
⑩編みつけ（装束縄でてごの周りに編みつけ、装飾付けをする）
⑪てごの尾ない（背負うための尾をなう）
⑫尾つけ（尾を通す装束に尾をつけて完成）

あばらてごの縦側装束の編みつけ。

あばらてごの縦側装束の編みつけ、並びにあばら編み。

いの目編み
縦縄2本を横縄2本で編みあげる。

いの目編み
段が変われば縦2本のうち1本を、次に編まれた2本の内の1本と合わせて編む。

めんぱ

Menpa

画像提供:一般社団法人諸塚村観光協会

食品を美味しく保つ秘訣は木製品特有の温かさ

「めんぱ」は、木製曲げ物の弁当箱で、わっぱ、めっぱ、めんぱ、めんつう等、地方によっていろいろな呼び名がありますが、本県では一般的にめんぱと呼ばれています。

材料には、主にヒノキ、杉、ネムの木が使われ、薄く削った材料を熱湯に入れ軟らかくして形を整え、細かく裂いた桜の皮で縫い合わせ、最後に底板をはめこみ完成します。

めんぱの特長は、ご飯がべとつかず、炊いたままのふっくらとした感じが残っている点にあり、ふたは、湯飲み代わりに使用できるほど精巧に作られています。

かつては日常生活用品であっためんぱも、アルミニウムやプラスチック製品に押されて姿を消しつつありましたが、形の柔らかさや木製品特有の温かい感触が見直されています。

作業工程

めんぱ作りの作業場の様子。

側板のひのきの板を茹でて曲げやすくする。

板を丸める。

かば桜の皮。

かば桜の皮で縫い留める。

杉の底板を形に合わせて切る。

側板に底板を嵌める。

穴をあけ、竹串で側板と底板を留める。

磨いて完成。

画像提供：一般社団法人諸塚村観光協会

ひなたの匠

Hinata no Takumi

DATA

特産品販売所　もろっこはうす

〒883-1301
宮崎県東臼杵郡諸塚村家代2640-3
☎0982-65-0264
受付時間:9:00～16:00(火曜日定休)

※購入についてはECサイトの他、もろっこはうすでも購入ができます
※オーダーメイドは5個以上から受付いたします

HPはこちら

オンラインショップ

甲斐 安正さん(県伝統工芸士)

めんぱは昭和58年度に県伝統的工芸品として指定されました。以前は6事業者が県伝統的工芸品指定事業者として指定されていましたが、現在では、甲斐のみが製作に携わっています。
甲斐安正氏は平成18年度に県伝統工芸士に認定されました。

小松原焼

Komatsubara-yaki

釉薬と炎の出会いが奇跡の「肌」を生む

小松原焼は、鹿児島の有名な苗代川焼の流れをくむもので、万延元年（一八六〇年）に都城市の小松原で始まりました。その後一時中断されましたが、昭和四十四年に宮崎市において再興され、現在までその技法が受け継がれています。

小松原焼の特徴は、苗代川焼の伝統的技法を継承した「叩き」のほかに、「釉薬（うわぐすり）」の研究によって作り出された独特のさめ肌、鈍甲（どんこう）肌にあります。製作過程での窯の火入れや、釉薬の調合で微妙な「肌」の表情が決まってしまうため、それぞれの工程で卓越した技術が必要とされます。

小松原焼は、力強く、重厚なため、花器・つぼ類から日常生活用品に至るまで、さまざまな用途に利用されています。最近では、新しい感覚の色彩を取り入れた作品も作られています。

作業工程

菊練り
空気を抜くための練り方のこと。
土を回転させて練り込む。その様が菊の花に見えることから菊練りと言われる。

ろくろ成形
ろくろを回し手で土を目指す形に作っていく。指先で土を挟み上に伸ばして、親指で少しずつ穴をあけていく。

道具で形を整える。

裏削り
逆さまにした器は上から手で叩き、中心を合わせて削る。少しずつ削り、器の底の部分である高台を作る。粘土が乾くタイミングを逃さないよう気をつける。

約10時間の素焼きのあと、釉薬掛けを行う。
ハケを使って大胆に釉薬を掛ける。色をつける大事な作業。

本焼き
1230°C～1280°Cまで温度を上げる。

本焼きは5日かけて焼くため寝らずに行う。本焼き後、3日ほど寝かせて窯出しを行う。

完成品

ひなたの匠

Hinata no Takumi

匠の道具

朴 平意さん（県伝統工芸士）

小松原焼は昭和58年度に県伝統的工芸品に指定されました。作品に対しては師匠から「見て学べ」とよく言われていました。見て学ぶ、自分で考えることが必要であり、できないならできるようになるコツを探ることを信条にしています。

DATA

小松原焼窯元

〒880-0926
宮崎県宮崎市月見ケ丘6丁目7-15
☎0985-54-2335

購入は電話で受け付けております。また、毎年宮日会館で開催される個展での購入も可能です。ぜひ工房にお越しいただき、直接その目で確かめてお選びください

HPはこちら

日向焼

Hyuga-yaki

すり鉢

土を知り尽くした職人の心と技が光る逸品

日向焼は、地元の三股・山ノ口粘土を混ぜ合わせ、各々の粘土の欠点を補い、ユス灰、蛇蝎釉、梅皮釉、天目釉、大井戸釉を使って独特の表面を仕上がりをみせ、焼成温度が高く確実な美と合理的な形体が高評です。

粘土配合の工程からロクロを回しながらの形づくり、乾燥・素焼・うわぐすりかけ・表面のやすりがけ・本焼・窯出しの工程までのどれをとっても、土を知り尽くした職人の心と技が生かされています。

作業工程

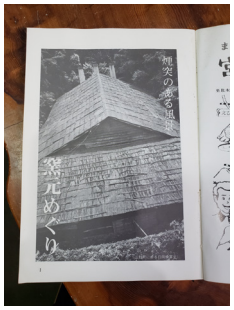
①年度配合･･･水越し（水と粘土を混ぜ合わせ沈殿させ水を蒸発る）
②形づくり･･･手ろくろを回しながら成形する
③乾燥･･･陰干し→日干しの順に乾燥
④素焼き･･･約800度で焼く
⑤釉薬掛け
⑥表面のやすり掛け
⑦本焼き･･･約1250度で焼成
⑧窯出し

籬氏が使っていた当時の匣(さや)
焼成時に降り注ぐ灰がかからないためや、積み上げて効率よくたくさんの陶器を焼くための容器。

このように中に入れて焼く。

黒千代香（くろじょか）

籬氏が築いた「登り窯」



日向焼は残念ながら令和5年現在、稼働している工房が存在しないため、資料に残されている当時の窯の様子を一部ご紹介します。

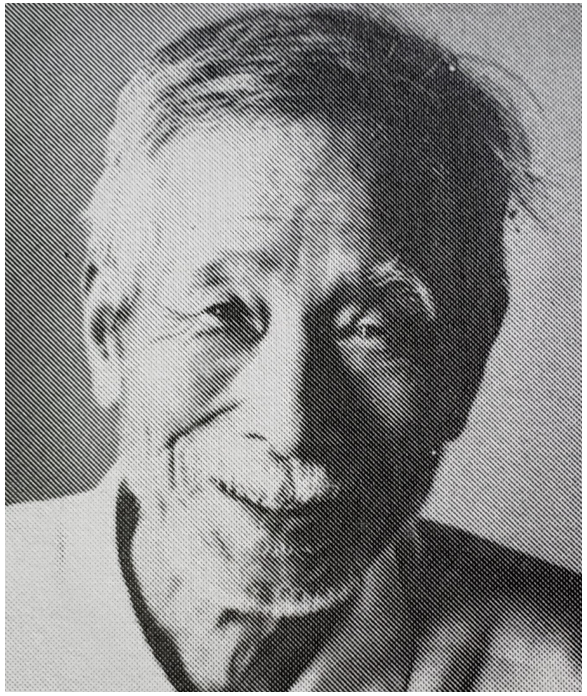
昭和20年に熊本県天草から陶芸用の良質の粘土を探し、三股町へたどり着いた。昭和23年2月に開窯した。県下の窯元としては最も古い。広い敷地の裏手の山の斜面を利用して築かれた「登り窯」は九州随一と言われていた。（現在は取り崩されてありません）

籬氏が1人で2年間かけて築いた登り窯は、間口約6m、奥行きは約17m、耐火レンガで約30度の勾配に5袋の段々上に築いた窯で3基の煙突が立っていた。

※宮崎県観光協会「窯元めぐり」より抜粋

ひなたの匠

Hinata no Takumi



※宮崎県観光協会「窯元めぐり」より写真を使用

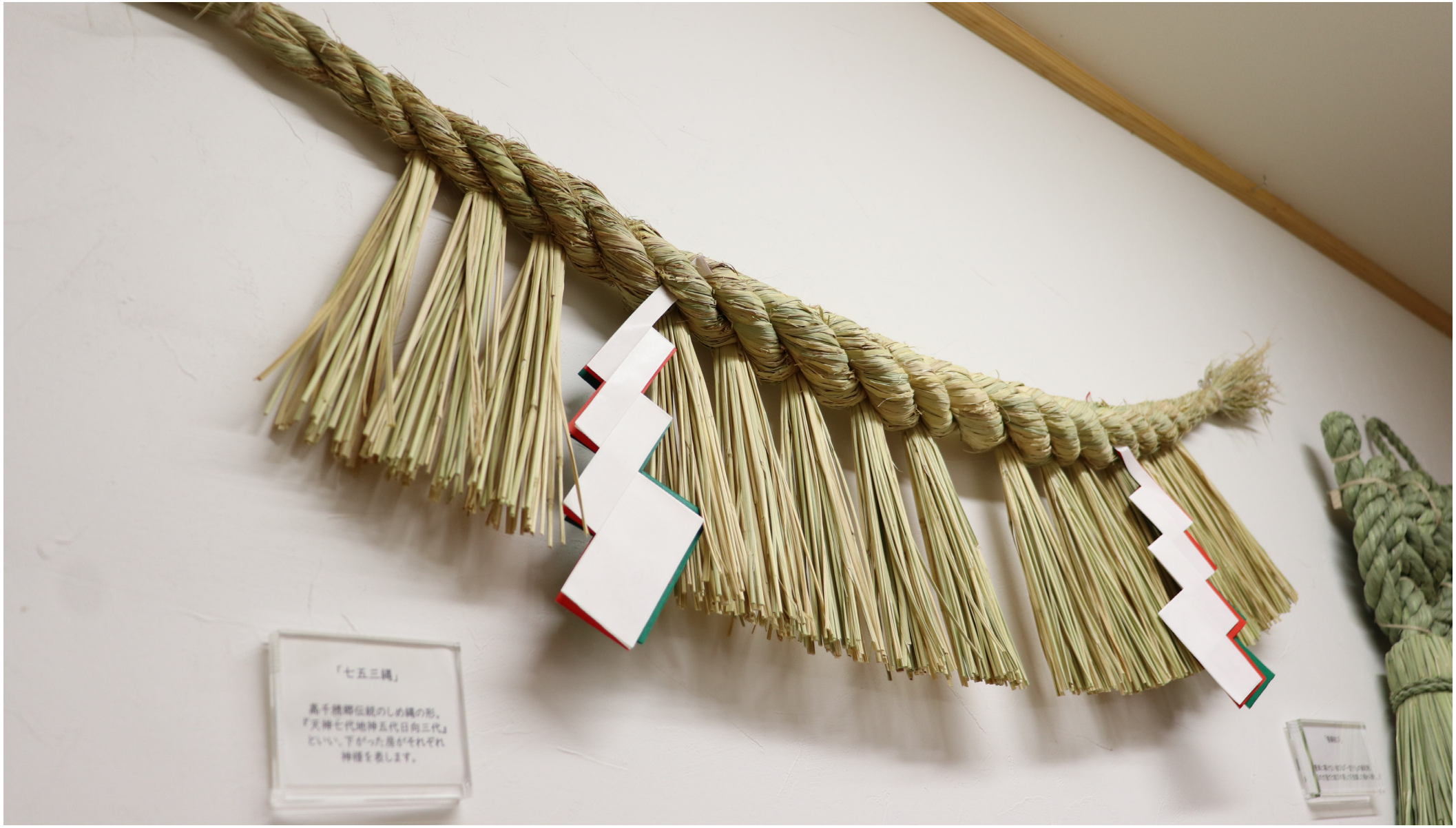
籬 清さん(県伝統工芸士)

日向焼は昭和58年度に県伝統的工芸品に指定されました。昭和60年度に県伝統工芸士として、籬（まがき）陶苑の籬 清氏が認定されたましたが、現在は逝去されています。

籬氏は15歳の時から石見、長崎、有田で修行した根っからの陶工でした。大正12～15年、焼物養成所で学び、大正15～20年、天草で焼物業を始めると、その後数々の作品を残しました。

高千穂郷しめ縄・わら細工

Takachihogo-Shimenawa・Warazaiku



自ら田を耕し稲を刈る その延長線上にある工芸

高千穂郷しめ縄・わら細工は令和三年度に県伝統的工芸品に指定されました。

工房がある日之影町は隣接する町や村とともに高千穂郷と呼ばれ、神話や自然崇拝が根づき、しめ縄は神楽とともに伝統文化の一部として定着しています。

製作においては縄を「綯う」技術が中心で、左右に向かって細くなる形状をしているこの地方のしめ縄は高い技術を要します。自らが育て収穫した藁を材料としており、農業と工芸が密接にかかわっている点にも特徴があります。

しめ縄については、高千穂郷で古くから伝わる「七五三縄」をはじめ「鶴の舞」「鶴亀しめ縄」を中心に製作し、地域文化の継承に貢献しています。

一方、わら細工については「祝結び」「祝亀」など約二十種類の室内に飾る縁起物の他、鍋敷きなど藁の特徴を生かした生活用具を製作し、現代の暮らしにも寄り添う工芸品として国内外から関心を集めています。

作業工程(七五三縄の一部)

米作りはしめ縄・わら細工作りの重要な工程。昔ながらの方法で、手作業により稲刈りと天日干しを行う。稲わらはしめ縄、青わらは縁起物に使用する。

8月に刈り取る青わら。祝結びなどの縁起物の製作に使用する。
写真:川しまゆうこさん
@kawashimayuko_peeco

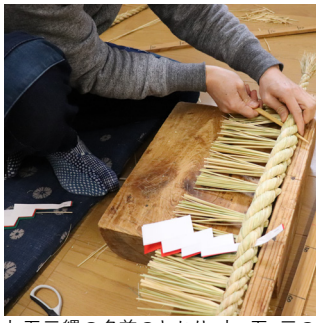
わらすぐり。わらの周りのはかき(枯れた葉等)を落とす作業。
写真:川しまゆうこさん
@kawashimayuko_peeco

稲わらのわらしゃぎ。
堅いわらの繊維を叩いて柔らかくする。手作業で約18回ほど回しながら柔らかくする。

綯う。七五三縄の両端が細くなるよう、わらの先端が端にくるように抑え、中心からわらを包み込むように綯っていく。

まっすぐに均等になるよう手で押さえながら整えたあと、余分な部分をカットする。

わら垂を付ける。
おたて(わら垂を付ける道具)を使ってわら垂を付ける。道具は自身で作る。



七五三縄の名前のとおり、七・五・三の順にわら垂を付ける。

上部にあるのが七五三縄の完成品。

ひなたの匠

Hinata no Takumi

甲斐 陽一郎さん

（わら細工たくぼ 代表）

匠の道具

愛用の道具　おたて

しめ縄・わら細工の作品を見た人や購入した人が「やってみたい「跡を継ぎたい」と思えるものづくりを目指すことで、ものづくりは次世代へ受け継がれる、と甲斐氏は語ります。わら細工たくぼの作品は、道の駅青雲橋で販売している他、ECサイト、他県の取引先の雑貨屋などで販売され、国外ではフランス、デンマーク、カナダ、アメリカなど約7ヶ国で取引があるそうです。伝統のしめ縄だけでなく、現代の生活に寄り添うことができる商品わら細工作りにも励み、精力的に活動しています。

DATA

わら細工たくぼ

〒882-0401
宮崎県西臼杵郡日之影町七折13782-2
☎080-1792-0753

[ご購入可能店舗]
・道の駅「青雲橋」　☎0982-87-2491（日之影町）

HPはこちら

オンラインショップ